

1. 活動報告（事務局 記）

—5月4日（日）①宇部市地球温暖化対策ネット（UNCCA 9からの連絡事項2点説明）

②作業活動

イ) 池ゾーンに新浮島製作（土嚢100個製作運搬）中

ロ) 草原ゾーンの草刈り他植栽木の周囲の手刈り

ハ) 市道からビオトープ入り口坂道修復

参加は17名と藤本さんお嬢さん（観察隊シニア隊員）計18名でした。

その他の連絡マムシー匹、ヤマカガシ一匹、皆さんで確認しました。

—5月12日（月）修復材料の寄贈を頂きましたので持ち帰り運搬しました。

① 湿地帯散策橋の破損修復用37mm×200mm×2400mm

板 4枚 兼光建設さんより （17日に修復で使用しました）

② 桧丸太伐採後3年もの（杭、橋通路用）φ70～100×2,000mm

40本 上小野の小林さんから

—5月17日（土）①水車水路の溝浚え及び周辺の草刈り。

②湿地帯散策橋の一部修復。（さらに追加修復が必要と判明）

③エコアップ 止水池の蒲草間引きとキショウブ間引き。

参加者は20名と子どもエコクラブの吉富さんとお母さん2名の応援があり作業も大変捗りました。参加された方大変お疲れ様でした。

—5月17日（土）午後の「里山自然観察隊」の活動は野鳥の探索で隊員30名、保護者会員22名、会員指導者14名でした。二俣瀬小学校から厚東川東側土手を南下し更にビオトープまで探索したくさんの野鳥を観察し鳴き声も聞き取れました。

その他 ①合鴨による蓮池の汚水浄化テストを山大 関根教授（ソイル・ブレーン社 河村さん、山大学生 小川さん）で実施されました。まとめについては追ってお話があります。

②田植え準備で 原田宗一会員にてトラクターによる荒起こしや蕎麦田の耕し（雑草返し）をしていただきました。

③—5月5日— 吉富匡会員蕎麦田周辺の草刈り実施（5/4活動日参加できなかった為）

2. 今後の予定（事務局 記）

◎ 見学者

— 6月7日（土）きらら子どもエコクラブ一行の観察会があります。当会から案内指導者を依頼されています。

◎ 行事

—6月1日（日） 維持活動（草刈りなど）浮島製作

同午後 支援団体地球温暖化防止キックオフイベント 当会から6名参加予定

—6月21日（土）午前 駐車場の草刈り、池内浮島拡大作業、湿地帯エコアップ

午後 里山自然観察隊（昆虫観察）

3. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)

ー4月28日ー 鶯はさえずり池の杭にはかわせみが小魚を狙って止まっている。「古代蓮ロマンの里」の蓮は芽が出ていないが代わってシマヘビとヤマカガシそれも1m近くあるヘビが対岸で泳いでいる。昨日であろう三角の田んぼがきれいに耕されていてすっかり整備されたビオトープで本当にゆったりした時間を持つ事が出来た。毎日でも来て見たい。 近くの年老いた住人

ー4月29日ー 晴れ 「昭和の日」ということで、二俣瀬ふれあいセンターに車を止めさせてもらい、子供二人(小3、小5)と「昭和山」に登ってきました。山頂付近のベンチでおにぎり弁当を食べ堤やせせらぎに足を止めながらゆっくり散策しております。いろいろ手入れなどお世話が大変でしょうが、これからもよろしくお願いします。子供たちもよろこんでおります。

宇部市東岐波 5024-2 今井恵一郎 45歳

4. ビオトープ関連(ビオトープ周辺の植物) 美濃和 信孝

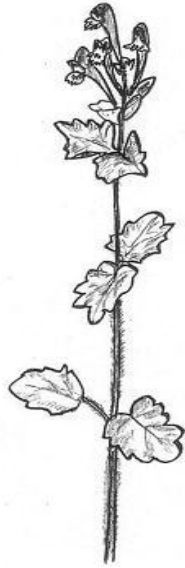
コバノタツナミとヒナギキョウ

初夏のビオトープの草斜面で咲いていたちょっと珍しい草花2種を紹介します。

コバノタツナミはシソ科の多年草で、漢字では「小葉の立浪」、小型のタツナミソウという意味です。立浪とは、花が片側を向いて咲く様子を泡立って寄せてくる波に見立てたものです。葛飾北斎の富嶽三十六景の一つ「神奈川沖浪裏」(大波の遠景に小さく富士山が見えているあの有名な版画)の波浪の様子と、コバノタツナミが群れ咲く様子はイメージが似ています。昔の人の想像力には舌を巻く思いがします。タツナミ草の仲間には、タツナミソウ、コバノタツナミ、オカタツナミソウ、ヤマタツナミソウなど他にも種類がたくさんあり、コバノタツナミは、葉の大きさが1cmくらいで小ぶりで、葉に密にビロードのような短い毛が生えているのが特徴です。分類学的には、タツナミソウの変種として扱われているので、一般的にはタツナミソウと呼んでも差し支えないと思います。海岸近くの坂や土手斜面に多く生育し、小野田の竜王山にはたくさんありますが、二俣瀬ではそうたくさん生えているわけではありません。日のよく当たる南斜面が生育場所です。

ヒナギキョウは、日当たりの良い道脇や土手などに細い茎を伸ばし、先に6mmほどの小さな花を付けるキキョウ科の多年草です。花色はキキョウと同じ青紫色、雛桔梗の名にふさわしいかわいらしい花です。似た花として、キキョウソウやヒナキキョウソウというのがありますが、この2種は北米原産の外来種で、段々にたくさん花を付けるので、長くて細い花茎を伸ばして頂にぽつんと一花を付けるヒナギキョウとはすぐに区別が付きまします。調べたところ、屋久島などでは普通の道端にもたくさん咲いているらしいのですが、宇部では二俣瀬で見たのが初めてです。コバノタツナミと同様、よく刈り込まれた南斜面が生育場所なので、花時期に刈り取りの不運に遭うことが多く、なかなか人目に触れる機会も少ないと思われます。かといって保護と称して草刈りをやめれば、じきにススキなどに負けて消えてしまう運命が待っています。里山を生活場所とする植物に共通する悩みです。

2003年10月から連載してきた「ビオトープ周辺の植物」は、今回をもちまして私の個人的事情により勝手ながら休載させていただきます。県外への転居により、原稿を書くことが実質不可能になったというのがその理由です。これまで4年半の長きにわたって1回も休むことなく掲載し続けることができたのは、会員の皆さんの後押しがあったおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。これまで取り上げてきた植物は100種を超えています。そしてその3分の1くらいの植物は、実はこの二俣瀬で自分としては初めて出会い、それを原稿に書いた、という植物です。それだけの自然のポテンシャルが二俣瀬ビオトープにはあったということですし、私にとってもこの連載は大変重要な研鑽の場でした。これからはビオトープの自然がさらに多様性を増して、多くの人にその価値が認められるよう祈っています。



コバノタツナミ (シソ科)



ヒナギキョウ (キキョウ科)

5. 会員の声 (新会員 内藤武顕)

“えん歩とたんぼの始発駅” パート1

夏草の駐車場は風情がある。車を止めて歩きたくなった。県道を横切って、赤い帽子が良く似合うお地蔵さまに挨拶する。少し歩くと“えん歩とたんぼの始発駅”の里山ビオトープの案内板が目に入る。白いトタンの案内板には葛が幾重にもからみ時の流れを知る事になる。

小道を100mくらいゆるやかにのぼると右手に視界が広がってくる。先程横切った県道を白いセダンがスピードを上げて走っている。遠くにはきれいに草刈りをされた長い川土手と葉桜の並木が見える。正面は風に大きく揺れる孟宗竹の森が周りを威圧して構えている。

眼下の須賀河内川はたんぼを真っ二つにして、細く曲がりくねっている。しかし、子供の頃の名残は殆どない。道は数分で左に急カーブ、そこから新緑の柔らかい草の小径を下ると“里山ビオトープ二俣瀬”の歓迎の大アーチが出迎えてくれる。ビオトープ行きの始発駅で汗をふく事になる。

◎ 癒しの初参加

ひと休みのコーヒ片手にふと振り向くと水車が春風を受けてゆったりまわっているのが見えた。癒される。自然の恵みに感謝して一句。

“ ゆっくりと 春風うけて 水車 (みずくるま)”

6. 里山自然観察隊 (5月17日、隊員 30名、保護者 22名、会員 14名)

野鳥観察 (寺森 正行 記)

25度を越える暑さの中、里山自然観察会の第2回として野鳥観察を実施しました。午後2時から3時半と野鳥にとっては休憩時間にあたり、鳥影はイマイチでした。観察スタートの市民センターでは巣箱からシジュウカラが飛び出して歓声があがりました。小学校校庭を横切り、厚東川にでると「青い宝石」カワセミが水面を飛びました。耕運機で田を耕すそばで白いサギが虫を採っていました。ダイサギ? コサギ? 図鑑をみせて隊員たちに同定させました。正体はチュウサギでした。オオヨシキリのギョギョシ、ギョギョシという鳴き声が川の葦原で聞けました。期待したホトトギスやキビタキのさえずりは聞けませんでした。昭和山の鉄塔に営巣中だったミサゴは管理工事作業で営巣放棄のようです。60余名の大集団が移動するので、野鳥もびっくりでしょう。暑さもなんのその、子供たちは元気一杯の観察会でした。

	種名	科名	2004年 5月22日	2005年 5月21日	2006年 5月20日	2008年 5月17日
1	ダイサギ	(サギ科)	○	○	○	
2	コサギ	(サギ科)		○		
3	アオサギ	(サギ科)		○		○
4	カルガモ	(ガンカモ科)	○	○	○	○
5	ミサゴ	(ワシタカ科)	○			
6	ハチクマ	(ワシタカ科)	○		○	
7	トビ	(ワシタカ科)	○	○	○	○
8	キジバト	(ハト科)	○			○
9	ドバト	(ハト科)			○	○
10	ホトトギス	(ホトトギス科)	○		○	
11	カワセミ	(カワセミ科)	○	○	○	○
12	コゲラ	(キツツキ科)		○	○	
13	ヒバリ	(ヒバリ科)		○	○	
14	ツバメ	(ツバメ科)	○	○	○	○
15	セグロセキレイ	(セキレイ科)		○	○	○
16	ヒヨドリ	(ヒヨドリ科)	○	○	○	○
17	モズ	(モズ科)			○	
18	ウグイス	(ヒタキ科)	○	○	○	○
19	シジュウカラ	(シジュウカラ科)		○		○
20	ヤマガラ	(シジュウカラ科)	○			
21	メジロ	(メジロ科)	○		○	○
22	ホオジロ	(ホオジロ科)	○	○	○	○
23	カワラヒワ	(アトリ科)	○	○	○	○
24	スズメ	(ハタオリドリ科)	○	○	○	○
25	ハシボソカラス	(カラス科)	○	○	○	○
26	ハシブトカラス	(カラス科)	○	○		
27	チュウサギ	(サギ科)				○
28	オオヨシキリ	(ヒタキ科)				○
		観察種数	18	18	19	18

7. 会よりの連絡事項 (事務局より)

- (1) 平成20年度の会費未納者の方は早めにお納めください。会計担当は大変です。
- (2) 活動日の作業活動に参加できない会員の方は会報の投稿などで参加願は如何でしょうか？

8. 編集後記

どっちが親か、子か、今年生まれたピオトープのアイガモもずいぶん大きくなり、大きさだけではわからなくなっている。せっせせっせと首を水の中に突っ込んで、草の芽を食べている様子。おかげで、蓮は、生えてきそうにない。古代バスもえさになってしまったようである。今年も雛が、田んぼに放されることになった。えさのやり過ぎでメタボがもたらぬよう、心して、かからねば。そうすれば、草取り作業は、楽になる。いや、やらなくてよくなるかも。しかし、来シーズンは、またまた、小がもが増えるのかも。うーん！どうする。

(藤井 義晴 記)